

大鳥蘭三郎先生の思い出

日本医史学会常任理事 酒井シヅ

大鳥先生に最初にお目にかかったのは昭和四二年の春、順天堂大学の小川鼎三先生の教授室であった。そのときの印象をいまでも鮮明に覚えている。

小川先生の狭い部屋は教授机の前に応接セットがあったが、大鳥先生はご不自由の身体をセットの椅子からはみ出しそうにして座っておられた。小川先生から大鳥圭介のお孫さんだと紹介され、歴史上の人物の御子孫がと驚き、どきどきしながら自己紹介をした。そしていきなり「あんたは医史学の何をやろうと思っているのかね」と先生独特の口調で、じろりと見ながら医史学に入った動機を問われたのにたじろいだことをいまま想い出す。

しかしそれ以来、先生からは親しくご指導いただいた。とくにこの頃から小川・大鳥両教授に大塚恭男先生が加わり、毎週四人で抄読会が開かれたこと、米沢藩の堀内家文書の研究が始まって、右のメンバーに片桐一男先生と堀内淳一先生が加わって、夕方から手紙や文書の解読を行ったことが懐かしく思い出される。堀内文書研究会で文書を解読するのに、小川・大鳥先生の性格が現れて興味深かった。たとえば小川先生は読めないところを徹底的に読んでから次に進もうとされるが、大鳥先生はそれにこだわらず、判らない所を後に回して先に進んだのであった。おおらかで、こだわらず、誰からも親しまれた人柄がそこにも出ていたのである。

当時の医史学会の例会は順天堂大学で開かれたが、小川・緒方・大鳥の大御所が出席され、かならず「ささまの和菓

子”とお茶が出されるといふのんびりとした会であった。

しかし、学会の台所は苦しく、学会誌を定期的に出すことが出来なかった。あるときは小川先生のポケットマネーでようやく出したこともあった。大鳥先生は杉田玄白の随筆や漢詩について投稿されたが、不自由な手で書かれた特有の文字の原稿が目につかぶ。

先生は生まれたときからのハンディキャップをお持ちであったが、何事にもチャレンジされ、どこへでも出かけられた。そのとき自然に誰かが腕を貸していたが、私が腕を貸すと「このステッキガールは頑丈でいい」と妙なお褒めの言葉をいただいたものである。



昭和44年、ハーグを訪れた
ときの大鳥先生と筆者

先生の医史学の業績は『半世の想い出』として出版されているからここでは改めて述べないが、先生の地道な研究の一つに日蘭交流史研究会のメンバーとしての活躍がある。オランダ生まれの先生にとって、オランダは文字どおり第二の故郷であった。

昭和四四年の日蘭シンポジウムに参加するためにハーグを訪れたとき、先生と阿知波五郎先生と私の三人で先生の誕生の地を訪ねたが、そのときの実にうれしそうな顔が忘れられない。先生と私は生家の前で阿知波先生に写真を撮って戴いたが、阿知波先生のカメラが壊れて、幻の写真となってしまった。大鳥先生と阿知波先生の友情も特筆すべきもの

であった。